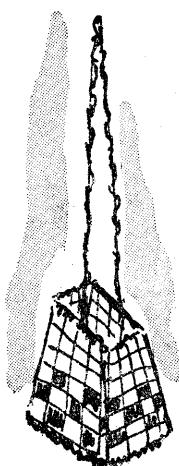


子どもの作話にあらわれた 比喩表現について

山本道子



はじめに　子どものことは表現の特徴は、語彙、語法の不完全さや誤用ばかりがなく、陳腐な表現にとらわれない、新鮮ないいまわし、などさまざま考えられる。特に話題が与えられ情緒刺激を受けた場合、子どものことは表現にどのような特徴があらわるだろうか。それを知るための一視点として今回は比喩表現を考える。これは比較的表現形式が固定しているため主観的判断を除外しやすいといつても一つの理由である。さて、比喩は一つの造語作用であると考えてよい。ある事物または事象に対する適語が見当たらない時、似かよつたものがあらわすことば、また

かろうか。そのような想定のもとに、子どもの比喩表現が作話文中にどのように出現しているか、また年齢別の相違、場面による特徴などを考察した。

対象及び方法　対象は幼稚園四歳児、五歳児、小学一年、二年。それぞれの男女一〇名ずつ、計八〇名。方法は文のない絵本“*What Whiskers Did*”(Ruth Carroll : Collins) (ページ数三六ページ)を見せて作話をさせ、それをすべてテープレコーダーに収録したものを再生し、文字化したものから比喩表現を選別、分類した。

結果及び考察　比喩には直喻をはじめ、いくつかの種類があるが今回調べた子どもの作話中の比喩表現は、直喻と声喻だけであり、暗喻その他の使用例は一例もなかった。また声喻について

表2 直喻と文数との比

	4歳	5歳	小I	小II
直喻1	0.5	0.7	0.9	1.3
直喻2	0.5	1.1	0.9	1.4
計	1.0	1.7	1.7	2.6

は擬音語、擬態語に分類した。
直喻について 全作話中であらわされた直喻の実数を年齢別に表示したのが表1、文数一〇〇に対する比をとったのが表2である。表1、2から、年齢が上昇するにつれ直喻の使用は一般に増加する傾向にあるといえるだろう。また逆に直喻を全く用いていないものの数は年齢上昇につれ減少していた。

直喻は更に直喻1と直喻2とに分類する必要があると思われた。直喻2とは直喻の一般概念とはやや異なり、絵の意味内容に確信がもてない時、断定を避け、たとえば“お姉さん、勉強しているみたい”のような表現である。

表1 直喻使用数

	4歳	5歳	小I	小II	計
直喻1	11	10	20	22	63
直喻2	10	16	18	24	68
計	21	26	38	46	131

表3 直喻使用数

	4歳	5歳	小I	小II	計
擬音語	41	25	42	29	137
擬態語	92	46	120	95	353
計	133	71	162	124	490

と関係があるのでなかろうか。それに対し年少の子どもは絵に描いてあるものを見て速断し、またはその意味を自己流に断定して、恣意的な作話をする傾向が強く、これは彼らの自己中心性に基づくと考えてよいであろう。ただし表2の文数比では、小I、五歳児、小I、四歳児の順となり、五歳児と小Iでは逆順になつてゐるのは興味ある事実である。五歳児と小IIは抑制的・慎重型であり、四歳児と小Iは饒舌型であることを昨年度保育学会で発表したが、その同じ傾向が文数比におけるこの逆順となつてあらわれているのではなかろうか。次に考えられるのは直喻表現そのもの（主に直喻1）についてである。すでに自分の知っているもの、経験しているものをもつてきて、未知の状況と対比し、類似点を見いだし、それでもって表現するのが直喻であるとするならば、このような操作は必ずしも年少の子どもにとって容易なことではないのではないか。直喻が比較という方法に基づくかぎり、それは二者の間の関係認識であつて、それはある程度の年齢発達を必要とすると考えてよいであろう。

直喻について 全作話中であらわされた直喻の実数を年齢別に表示したのが表1、文数一〇〇に対する比をとつたのが表2である。表1、2から、年齢が上昇するにつれ直喻の使用は一般に増加する傾向にあるといえるだろう。また逆に直喻を全く用いていないものの数は年齢上昇につれ減少していた。

直喻は更に直喻1と直喻2とに分類する必要があると思われた。直喻2とは直喻の一般概念とはやや異なり、絵の意味内容に確信がもてない時、断定を避け、たとえば“お姉さん、勉強しているみたい”のような表現である。

これも比喩表現には違いないが、推測に基づく作話であることの表示でもある、直喻2も年齢とともに増加する傾向があるといつてもよいが、これは年齢上昇に伴なう、作話に対する慎重さ

表4 声喻と文数との比

	4歳	5歳	小I	小II
擬音語	2.1	1.7	1.8	1.7
擬態語	4.6	3.1	5.2	5.4
計	6.6	4.7	7.0	7.1

声喻について 声喻を全作話中からひろい、擬音語と擬態語に分類し、表示したのが表3である。小Iがもっと多く、四歳児がこれにつぎ、以下小II、五歳児の順である。全く声喻を用いないものの数はこれと逆であった。声喻の数と文数との比（文数一〇〇に対し）は、小Iと小IIがほぼ等しく、ついで四歳児で、五歳児がもっと少ない（表4の計）。

次に擬音語と擬態語との使用数を比較すると、前者より後者の方が多く、その比は一対一・五八であり、また擬音語の一人当たり使用数平均は一・七一であるのにに対し、擬態語は四・四一である（声喻全体では六・一三）。各年齢ともこの傾向は同様であるが、それぞれの年齢で擬音語一に対する擬態語の比は四歳児二・二四五歳児一・八四 小I二・八六 小II三・二八となる。五歳児は四歳児より比が小さいが、年齢上昇とともに擬音語対擬態語の比は一般に大きくなる傾向にあるといつてよいであろう。

（表3）、擬音語では、小Iと四歳児がほぼ等しく、小IIがこれに

つき、五歳児がもっとも少ない。これに対し、擬態語の場合は小Iがもっとも多く、小IIがこれにつぎ、四歳児の順になる。それについて、文数一〇〇に対する比をみると（表4）擬音語では四歳児がもっとも多く、つづいて小Iで、五歳児と小IIはほぼ同じである。擬態語では小IIがもっとも多く、小Iがそれにつぎ、四歳児、五歳児の順となる。擬音語について年齢別の特徴をいえば四歳児が比較的多く、擬態語では小IIが比較的多いといえるであろう。直喻のような複雑な操作と違つて、擬音語は直接に聴覚に達する音を真似して表現するもので、普通のシンボル言語より直接的、感覚的であり、年少の子どもにも比較的容易に行えるものである。以上のことから考えて、表現意欲の旺盛な四歳児に擬音語が多いことも自然ではなかろうか。また擬態語では、小IIが比較的多く、更に文数対比でも、擬音語と擬態語の対比においても全年齢中もっとも大きかった。このように小IIでは擬音語は他と比べて多いとはいえないのに擬態語が多いのはなぜであろうか。擬音語は実際の音を真似る直接性があるが、擬態語は音をそのまま真似るのではなく、本来音を発しない対象の動きや状態を音的印象に移しかえて表現するものであるから、擬態語の方が象徴性、あるいは抽象性が強いといつてよい。擬音語の場合ももちろん自然音そのままでなく、日本語の音韻構造に調和するようになら

型され、いわばペターン化されるわけであるが、擬態語の場合はペターン化は一層強いといえるのではなかろうか。そのような意味で、擬態語の使用には音象徴による表現の一型の型を覚えていることが条件になると考えられる。擬態語で小IIが比較的多いのは、年齢上昇につれ擬態語表現のストックが増加しているといふことが一因であろう。では四歳児が比較的多いのはなぜか。四歳児の擬態語を検討してみると、恣意的な表現が目立つ。たとえば、男の子が後へひっくり返る所で、四歳児は“パワーって空からブーって”など意味不明の表現を行う。正しく擬態語を用いている場合でも、“ビヨンととんだみたいになつた”というのに対し、小IIでは“男の子がステンとろんで”とか“バッとはなれて、ボカーと倒れて、デーと走つて”というように、慣用表現を巧みに用い、また動きのある画面を生き生きした擬態語を用いて巧みに表現している。また、きつねがはじめて出現する場面で、四歳児“ひこひこして”（意味不明）、小II“びくびくして”的表現の相違もこの例である。また、三十五ページで男の子が犬を心配して待つている所で、四歳児はただ“ずっと待つとつて”であるのに対し、小II“ショボンとしている”、小I“ションボリしどつたら”と表現する。五歳児は擬態語は少ないのであるが、その擬態語は正確で、慣用からはずれた表現は一例にとどまる。小

I、小IIには意味不明の、あるいは慣用からはずれた擬態語は全くなかつた。

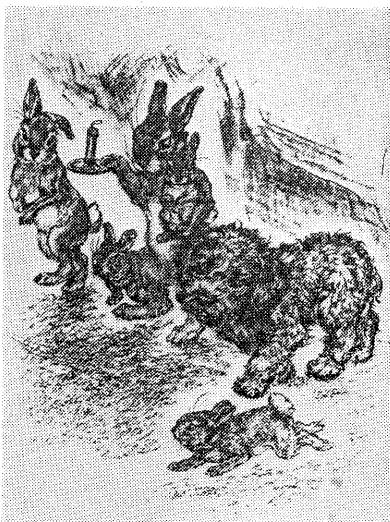
場面・状況との関係 作話中の比喩表現と特定の場面や状況とはどのような関係があるかを直喻及び声喻についてそれぞれ考察した。

直喻 直喻の使用数と特定場面との関係を考察するため、絵本の絵を次のようない観点から類別した。すなはち日常生活や自然界で、常識的に考え現実に起こりうべき状況と起こりえない状況、つまり虚構の世界（たとえば擬人化）を考えがいたもの、の二種である。前者、つまり現実的な状況に属するのは、三十四場面中二十三場面、後者つまり虚構に属するのは、それ以外の十一場面である。さて、この両者と直喻の数との関係を比較してみると、現実グループに出現する直喻の一場面平均は二・九であるのに対し、虚構グループでは一場面平均五・九であり、虚構グループは現実グループの約二倍の出現率をもつことがわかる（なお、全体平均は三・九）。現実には起こりえない状況について作話する場合、“～のように”“～みたいに”という直喻表現が出現するのは自然ではなかろうか。以上のことを直喻のもつとも多いページ（三十一ページ・十三個）について例をあげて説明しよう。こ

こはうさぎの家族全部がローソクを持って穴の入口まで犬を送つ



35 ページ



31 ページ

ていく場面である。"ローソクみたいなもんもつとん" "しるしみたいにローソクをつけといて" "暗くなつたみたいなんやね" "こんどは夜みたいにね" "停電なつたみたいね" などのように、うさぎや犬がローソクを持って歩いていく状況をそのまままで述べるのに多少の抵抗を感じた子どもの気持ちが、このようなためらいがちな表現となつてあらわれたと思われる。あるいは虚構をできるだけ現実原理でもつて説明しようと試みる合理的態度のあらわれであるのかもしれない。このページについて直喻の多いページ（二十八、三十、二十九の各ページ）でもこれと同様のことがいえるのだが例は省略する。

声喻 声喻の使用数は一場面平均十四である。この声喻を更に擬音語と擬態語に分け、それぞれの場面毎の平均をみると、擬音語四、擬態語は十となる。声喻の一番多いのは三十五ページである（四十四個）。このページは擬音語が圧倒的に多い。犬がやつと男の子の所へ帰つて来て、心配しながら待つてゐる男の子に向ひ口を開けている絵であるから "ワンワン" という擬音語を用いて作話するものが多いのは、当然の結果といえるだろう。ついで二十九ページが声喻の多いページである。ここは犬と子うさぎ三四が遊ぶ場面で、犬がうずくまつて、うさぎたちは犬の背中から好きな方向へ飛びおりてゐる場面である。活発な動きの感じら



20 ページ



29 ページ

れる絵で、子どもは作話の中にその動きを表現するのに擬態語を多く用いている。声喩のうち、ほとんどが擬態語であった。とんでも、すべつたりする、動きのある場面であるせいだと思われる。大部分の擬態語は、子うさぎの動きに集中している。小日は典型的な例をあげると、"チヨンとのつかつて、スルンとすべつて、ピヨンととどき"といつているが、このように小日は擬態語表現が巧みである。四歳児でのページに擬態語が多いのが一つの特徴で、中でもピヨンピヨンという擬態語が多いのだが、とびはねる表現としてはこのいい方を早くから覚えるのである。小I、小IIは子うさぎの動きの擬態語表現にバラエティがあるようである。(つづいて声喩の多いページ(三、四、九、十、十一、十四の各ページ)も同様に動きの感じられる場面で上述のことがそのままあてはまるのであるが紙面の都合で使用例は割愛する。

一、直喻使用数は、調査対象としたこの年齢帯にあっては、おむね年齢上昇とともに増加する傾向がある。直喻表現が比較とう操作を必要とするため、知的発達と関連していると考えられる。また直喻使用数は作話の際の慎重な態度とも関連をもつようである。

二、声喻のうち擬音語より擬態語の方が使用度数が高い。この

傾向はおおむね年齢上昇とともに顕著になっている。また擬音語の使用は年少児が比較的多く、擬態語の使用は年長児に比較的多いのはこれらの表現形態のパターン化の強弱の差に、その原因があるのではないか。質的にいっても年長児の擬態語表現は巧

みで正確である。

三、現実に起りえない場面、つまりフィクションの場面では他の場面よりも直喻の使用度が高い。

四、声喻では擬音語が特定場面に集中し、擬態語は動きの多い活

発な場面に多く用いられる傾向がある。
(姫路短期大学)

倉橋賞を受賞して

思いもかけませんでしたことで、それだけに驚きも大きく、何よりもうれしく存じました。実は大会の数日前から体調が思わしくなく、それを押して出席しましたので、後の学会行事を残したまま帰ってしまったのでした。授賞式に参加できず、大切な批評を伺うことができなかつたことがかえすがえす心残りでなりません。

の受け手側の反応を調べることに強い興味をもつようになつたのですが、絵本は多くの要素が複雑に有機的にからまりあって全体的な効果をもつものですから、受け手の反応といつても、それをつかまえることは方法的に非常にむずかしいことでした。めぐら蛇におじずとはこのことでしょうか、ともかくこの二、三年、私なりの方法で一步二歩のあゆみ出した所だつたのです。

児童文化を、受け手側の視点から見なおしたい、というのが私のかねがねからの願いでした。ここ数年来の絵本の勉強から、そ

の午後、教室の片すみや保育室で子どもと並んで絵本を見たもの